

垣間見れ 志波氏の星を 食い漁り
かいまみれ しばしのせいを くいあさり
貝塗れ 暫しの性を 悔い焦り

夜一はいるかー？」

門前でがなる声を聞きつけた碎蜂が出迎えると、その人は金平糖をくれた。

星の形をした菓子はそれほど珍しくはない。けれど、碎蜂とて女の子。甘いものには目がない。喜んで、お礼を言った。

「いんだよ、ウチの客が置いてったんだから。花火師に星の菓子なんて、まあ洒落てるけどな、いくらなんでも貰いすぎた。ちよつとずつ誰かに分けようと思ってたんだ」

歯ぐきが見えるぐらい、にかあつと笑って、その人は言った。

碎蜂はこの女を嫌いではない。没落したとはいえ、元上級貴族の家柄ながら、はずっぱな男のようなしゃべり方をするけれど、その心の奥の奥では優しいことが分かる気がする。乱暴でやっかいごとが大好きでも、性根の芯は火のように熱い。

ほら、もつと食べよ」

星の形をした菓子を、口の中に押し込まれた。甘くて、幸せな味がした。

主が自分のことを気遣って、申し訳なく思うなど、あつてはならないことだ。だから、あえてそれには言及しない。

神の如きこの人が自分のことを思うなど、絶対にあつてはならないことだ。碎蜂はかく自分に戒めてきた。

碎蜂は一人、門を出た。やることは特にない。語り合つて暇を潰す刑軍の同僚もここにはいない。

清流のふちに腰をかけて、流れゆくひとひらの葉を眺めた。眺めているうちに、ちりちりと嫌な予感が首筋を刺した。

客人のことはよく知っている。流魂街随一の花火師であり、夜一の友人。何を不安がることであろう。内密の話というものは確かに気になるが、それを尋ねることは出過ぎた真似だ。

一介の隠密が知って良いことではない。

知らず知らずのうちに、汗が玉のようになって額に浮かんでいた。

振り払うように、路傍の草を千切って投げた。川面にすら届かず、ぶざまに地へ落ちた。

息をつく。それでも、胸の内の不安は去らない。

先刻貰った一粒の金平糖を口の中に放り込んだ。

砂糖菓子は甘い。だが、苦い気持ちを打ち消しはしない。

なぜだか、戻らなければいけないと思った。

志波空鶴。流魂街随一の花火師。
主が待ちわびていたその人であった。

滯霊廷からわずかに離れた物静かな清流のほとりに、四楓院家の別荘があった。そこは内密の客人があるときによく使われた。ことが同胞の処刑と暗殺ともなれば、滯霊廷内で話をするのはまずい。代々刑軍軍団長をつとめるこの家だからこその特期待遇であった。

碎蜂だけを伴につれて、四楓院夜一は昨日から別荘内に控えていた。空鶴の方から内密の話があるという。

客人が来たと伝えると、夜一はそうか、と一言だけつぶやいた。

碎蜂は頭を下げて、その場を去ろうとする。

その背中に夜一が声を掛けた。

碎蜂」

は」

振り返ると、夜一はどこか後ろめたいような目で碎蜂を見ていた。

「一刻は戻らぬようにな」

分かりました」

碎蜂はそれを見なかったことにする。

この悪い予感が外れたことは、未だかつて、一度もない。

けれど、主の言いつけを守らなかったこともまた、一度として無かった。

そのことを碎蜂は忘れている。

ゆっくりと立ち上がった。足音を殺し、霊圧を不自然でない程に殺す。先程出たばかりの別荘へ向かう。

門をくぐっても、声は聞こえない。耳を澄まして、歩み続ける。声を掛けることも出来ず、二人の霊圧を頼りに屋敷内を探す。

邸内は薄暗い。板はきしりとも言わない。

己一人しか、本当はいないのではないか、そんな錯覚を覚えたとき、

「…あ」

微かな音が聞こえた。

それは、何だったか。

碎蜂には、己の耳を疑う余裕もない。

ただ、かすかに開いた襖の隙間から、その情景はかいま見えた。

「…つ、く」

誰かが、背を反らせて、身を他の誰かにゆだねている。

白と黒。真珠の肌、鮎色の肌。客は光、主は闇。互いが重なり合い、溶け合っている。

刻限のわりにはまだ早い灯火がちり、と音を立てて、うねる二人の姿を映し出している。

戯れとも、もみ合っているともつかぬ、その激しい動きは、碎蜂を凍り付かせた。

お、あ、

顔と顔が、近づく。離れることに、息継ぎが為される。その喘ぎは、まるで見せつけるように仰々しい。絹糸の如き白い一線が唇から引かれることもある。激しい水音を立てて口づけを繰り返した。

着物をはだけた空鶴の右腕は無い。その露わになった右の乳房に、主の手が掛かっていた。指先が別の生き物のようにその大きな乳をもみしだく。

「、馬鹿野郎、よる、いち」

世話を焼かせておいて、その言い方は無いじやろう」

夜一の声は笑みを含んでいる。意地悪くにやついて、口づ

はつとして、目を閉じ、耳を両手で塞いだ。しゃがみ込む。

無明の闇が、沈黙が、怖いほどに碎蜂を包む。

今、何を見ていた？

今、何を考えていた？

今、何をしていた？

混乱する頭は、言うことを聞かなかった。

どうして、こんなことに。

もう何も見ていたくない。何も聞きたくはない。はじめから何もなかったのだと思いたい。

目は見えず、音も聞こえない。それでも口の中の甘さが残る。金平糖の棘が、口の中を刺す。

吐き出すわけにはいかない。

木の床に硬い棘がぶつかれば、たちまち耳の聡い二人は気付くだろう。

そして、あさましく、胸の内を熱く高鳴らせた自分を見つめるだろう。腰のあたりをあからさまな劣情で濡らした自分を見つけて、蔑むだろう。あるいは、同情するかもしれない。

けをかわしながら、指先は自由に動く。五指と掌を自在に使用して、揺らし、つまみ、撫で、こする。ひどく慣れきった手つきで、愛撫を続ける。

その指をじっと見ていた。じっとじっと、同化するかのように見つめる。

その指は、知らぬ間に自らの身体へ触れてきた。碎蜂はそう感じた。

私に触れる、熱いこの指は誰の指だ。

此処で蠢いているのは、きっとあの人の指だ。

ほっそりと長く黒く、強くはかなく、誰かの乳房をなまめかしげに引つ掻いている、あの指だ。

ひどく強く低い声で、誰かを求めているその声は、あの人の声だ。

その声に押されて、細い声を殺して、喘ぎ、心を揺らしているのは、誰の喉だ。

ひうひうと、白い喉を通り過ぎようとするその喘ぎを、一歩手前で押しとどめているのは、誰の唇だ。

きっとそれは、あの人に抱かれている、私の、ものだ。

口の中がひどく甘い。ざらざらした金平糖は硬い。求めて追えば届かぬことを思い知らされる、憧憬のように甘く硬い。かみ砕くことも出来ずに、ただ舌先でなめ回すだけ。そのうちに疲弊してすり減って、無くなってしまうかもしれないと、恐れながらも、ただその甘さを味わいたくて、その日その日をやり過ぎしていく、この日々に似ている。

もう、いつそのこと、口の中からつまんで出してしまえばいい。

右手をそっと耳から外した。

その刹那、ざあっと何かがばらまかれる音がした。びっくりして目を開いた。

勿体ないのう」

「…くそ、懐に入れといたのが全部バアだ」

床の上に砂糖菓子の星がちりばめられている。

その一つ一つが、ぼうっとほの明るく光っていた。

夜一、お前も食え」

空鶴は言うなり、夜一の腕の中からすると抜け出した。

床の上から拾っては無造作に口の中に放り込み、がりがり盛大にかみ砕く。その奔放さは羨ましいほどだった。

夜一は当惑顔で、彼女を見ている。

「……まあ、五秒ルールというのもあったか」
「うるせえ、ルールなんて関係ねえよ。もったいないから食うだけだ」
「からっと答えて、砂糖菓子を食べる。」

と、隙間から、一瞬、目が合った。

電流が流れたような衝撃が碎蜂の背筋を走った。
空鶴はにいつと破顔して、また目をそらした。

主が訝しげに問う。

「どうした、空鶴」

「へ、何でもねえよ」

舌をちろりちろりと出して、こちらをまた見る。

舌の上で、わざと金平糖を転がす。赤い肉の上に白い星が踊るのを見せつける。

「お前も食えよ」

拾った星を、夜一の口に押し込める。柔らかな唇が硬い星を吸う。

そのままの指先で、空鶴は夜一の唇を撫ぜた。そのまま強引に口づけた。

「む」

夜一が抗議しようとする。その手を押しとどめて、空鶴は

言った。

「黙れよ」

深い口づけは続く。

粘性の増した唾液が唇からこぼれ落ちる。どろりとした透明な液体はゆつくりとおとがいへ滴っていく。

「ごくりと、碎蜂の喉が鳴った。」

二人とも振り向いた。夜一は早急に、空鶴はゆつくりと。

夜一は凍り付いて、黙る。

「ははっ、バレちゃってるぜ。どうする、夜一」

おもむろに空鶴は立ち上がる。露わになった上体を隠そうともせず、ゆらりゆらりと大股に碎蜂へ近づく。襖を大きく開いて、碎蜂の姿を明るみに出した。べったりと床に座り込んだ碎蜂を見下している。

「なんかエロい顔してんぜ、この人もさあ」

「にやりとして、頭を撫でた。」

「さ、触るな」

振り払うが、避けられた。

「へっ、見るだけでそんな顔してたんじゃ、保たないぜ」

首筋に触れる。びくりと震えた。

「いい感度してんじゃねえか」

「そんなコトしても、夜一のこととは分からないぜ」

刺青の入った左手で、碎蜂の唇を撫でる。噛みしめた歯へ

唇こしに指が触れる。

「おれの菓子、美味かっただろう」

締めた喉の軟骨が、くつくつ震えるのを碎蜂は感じた。

「夜一は、もっと美味いぜ」

「思わず手に力が入った。」

ぐう、と呻いた空鶴の顔が朱に染まる。手が、独りでに力を込めていく。頭のどこか隅の方が、これは仕方のないことなのだと言わんばかりに、最早、碎蜂の目に空鶴は敵としてしか写っていない。

敵に姿を見られたならば、殺せ。隠密の本能が告げている。見える物はただ一点。灯火を火花のように眩しく返す、汗をかいた空鶴の喉元だけだ。戦いがひとたび始まれば、考えるべきは敵の殲滅のみ。それが隠密としての、修羅としての生き方だ。命などとうに捨てている。敬愛する主のために。

「止さないか馬鹿者！」

誰かが、無理に二人を引き離した。空鶴の咳き込むのが、遠く聞こえる。

途端に、狭窄していた視野が開けた。最初に見えたのは、緩やかにうねる主の黒い髪だった。

頭の中がいったん空になる。先程までの憤怒が、萎んでい

くつくつ、笑う。

「当然、交ざるだろ、あんたも」

目の前が白くなる。言われた言葉の意味が分からない。

「止せ、空鶴。そやつには手を……」

「カタガタ煩えよ夜一！」

空鶴が一喝する。

「そりゃ子供にや早えだろうよ。でもよ」

「しゃがみ込んで、碎蜂と視線を合わせる。その目は真剣だった。」

「お前は悔しくねえのか？」

「挑発する口調で、言う。」

「アイツの身体のうち、おれが知ってて、お前が知らないトコがあるなんてよ」

頭の中が熱くなる。渦を巻く思考、燃え上がる感情、いずれともつかない奔流が胸の内から喉へ。

「貴様あつ……！」

「ただ必死で空鶴の開いた喉元に手をかける。空鶴は振り払えない。」

「おれを殺す気かよ」

「にやついたまま、空鶴は碎蜂を見下している。」

くのがわかった。

代わりに沸いてくるのは後悔。

言いつけを守らないと、こうなる。

危うく夜一様のご友人を殺してしまうところだった。

自分は、馬鹿だ。痛いほどにそう思う。

「…馬鹿は」

空鶴のつぶやきが、痛烈に鼓膜を打った。

「でめえだろッ！」

左手だけで、空鶴は夜一を抱きしめた。むしろ、飛びかかっただけに近い。

そのまま勢いを殺さずに夜一を押し倒す。喉にとがった肩の骨を押しつけ、両足を使い、全力で挑む。大きな音を立てて二人は転がりあった。ばさりと木の床の上に空鶴の長い髪が広がる。

碎蜂はあっけにとられて目を見開いたままでいる。

すぐにもみ合いは止んだ。

馬乗りになった空鶴は肩で息をしている。

対して、息一つ乱していない夜一はどこかあきらめ顔で仰向けになっていた。

主の危機だというのに、碎蜂はただ見ているだけしか出来

なかった。

面倒事好きなのは、おれだけで十分だ」

空鶴は一人こちてから、碎蜂の方を向く。長い髪からかいま見えたその目は、恐ろしいほど澄んでいた。

「ほら、触ってみろ」

夜一へ向けて、顎で示す。

「嗅いでみるよ」

空鶴は左手を、夜一の上からどかした。自由になれる筈なのに、主は動こうとしない。

「食ってみなきゃ、金平糖の味なんざ分かんねえだろ」

「だから、お前も、食え」

金平糖をそっとつかみ、差し出した。

碎蜂はただ、ふらりと吸い寄せられるように、それをついばんだ。

一度床に落ちた物だと思いついても、口に入れた砂糖菓子を吐き出す気にはなれなかった。

「金平糖は甘い。」

「甘くて、幸せな味がする。」

「この甘い日々を、もっと甘くすることが出来るのなら、

私は、馬鹿にでも、修羅にでも、なろう。」

唾液の跡が残る。

頬まで来れば、後は唇のみ。

碎蜂は、何の躊躇もなく唇の上の金平糖を、ついばんだ。

その瞬間に、空鶴は碎蜂の頭を押さえつけた。

「わっ……!?!」

頭を上げようとするが、万力で抑えられたかのような力でびくともしない。

「甘いよなあ、ツメが」

「笑う。親しげにからからと。」

頭を押さえたまま、空鶴は腰を浮かせる。夜一は動かない。

ただ微かに、唾液を嚙下する音が聞こえた。

空鶴の左手が、右の脇の下に置き換えられる。それでもな

「お、頭は動かない。」

「着物、緩んでんじゃねえか。世話あ、ねえな」

左手だけで器用に帯がほどかれる。ぐい、と襟元から手を差し入れられる。汗ばんだ首筋が空気に触れて、ひやりとした。はだけた着物が、主の頬に掛かった。乏しい胸が、主の目の前にさらけ出される。

頭に一瞬にして血が上った。

四つ這いのまま強ばって動かない手が、微かに震えた。

「かすかに光る。」

碎蜂は四つ這いになって、髪の中に頭を埋めた。ゆるんだ

着付けのせいで、胸元がかすかに開く。それにも構わずに、

唇でまさぐった。星を唇で奪えば、うねる黒髪が口腔の内へ

入り込んできた。味も分からないほどのひと筋だ。それでも

頭を上げると、髪は唇からつ、と出て行った。

「ひどく寂しい、心地がした。」

「口の中の星は甘い。だがそれでは足りない。」

「口寂しいか」

空鶴はおびき寄せるように、一粒一粒、金平糖を置いた。

床から始まった星の道筋は、夜一の髪から額に、眉間に、まぶたに、頬に、やがては唇へと続いた。それをまた、碎蜂は

「一粒ずつ唇で拾っていく。」

初めて唇が主の肌に届いたとき、びくりと、お互いの身体が震えた気がした。

濡れた唇が星の道をたどっていく。光る星の代わりに、甘

まさか、ここまで来て逃げるなんて、言わねえよな？」

囁いた花火師の指は導火線だ。

砕蜂の肌の上を這い、舐めてゆくことに、身体に火がつく。ちりちりと焦げ付いて、黒い欲情がくすぶっていく。どろりと溶けたものが下腹から流れ出ていき、下着を濡らす。

頭を押さえられたまま、砕蜂はびくりとも動けない。ただ左腕一本で着物は乱され、晒しは解かれていく。

「……っ、く、ぶはっ」

息を継いだ。力が抜けていく。舌先さえ痺れて、口の中の唾液を嚥下することも出来ない。主の唇を甘く汚して、溶けかけた金平糖がかの頬へ滴る。どろりと白い砂糖菓子の欠片はゆっくり夜一の頬をつたい、床に落ちて冷えた。

導火線は首筋から鎖骨へ胸元へ延び、わずかながら重みで常よりも嵩かさの増した乳房を撫ぜる。

身体を支える腕が萎えていく。腰がびくびくと震える。身体が何かを守るように丸まろうとする。自分の内側にある、大切な何かを固持しようとして、身をこごめた。

主の目を思う。己の顎の下にあるはずの、憧れのひとの視線を思うと恥ずかしく、声も上げられない。ぴんと立った乳首も、身じろげばかすかに揺れる乳房も、誰かの、別の何かを欲して、うす紅く燃えている。

主が起きあがるのを、すぐ隣で感じた。顔は見えない。

「この間の爆殺用の火薬代、お前の指で払ってもらおう約束だろうがよ」

儂の指をお前に突っ込むのは構わぬが、部下にそれをする筋合いはない。砕蜂は勘定に入らぬ」

お前のモンはおれのモンだろ。んで、刑軍はお前のモン。だからお前ら二人ともおれのモンだ。おれのモンをお前に抱いてほしいんだよ。それでおれがお前を抱けばいいのさ」

生憎、刑軍は儂の臣下ではあるが、持ち物ではない。借りと持ち物をごちゃごちゃにするなよ」

砕蜂を置いたまま、掛け合いは続く。言葉だけ聞けば剣呑だが、口調はごく軽い。

「……あの」

砕蜂は小さく呼びかけた。

ほら、こいつだって抱かれたがってる」

勝手な解釈をして、空鶴は砕蜂をあおむけに返した。

けれど、皮肉なことに、空鶴の考えはあながち的はずれでもないのだ。砕蜂が何も言わなくても、紅潮した肌も、のぞく胸の突起も、潤んだ目も、かすかにほころびた唇も、全身でその感情のたかぶりを伝えていた。

唇はひどく熱いのに、腰はひどく濡れているのに、それでも何かが足りない。

おれでは不服か」

ひときわ強く、つねられた。

「……！」

声もなく、砕蜂は床に伏した。ただ触れていただけの唇が外れ、堅い木の床に接吻した。荒げた息の熱さが己の鼻にかかる。頬と頬が触れ合うと、粘る唾液のせいでべっとりと張り付いた。

「じょうがねえな。夜一、お前じゃねえとダメだ」

「……断る」

夜一は、おごそかに言った。

その拒絶の声を、砕蜂は雷のように聞いた。全身が畏れに震え、喉元は刃を突きつけられたようにびくついた。

主は、自分を抱くことを、拒んだのだ。

部下を儂の借りを返すのに使うわけには行かぬからの」

「ハッ、干涸らびた猫の糞みてえなこと言ってるじゃねえよ」

空鶴の手が砕蜂の下から退いた。

きつと失望しただろう主の顔を見たくなくて、砕蜂は目を閉じた。

お前がそう言うのなら、仕方があるまい」

主の声が、雨の如く降る。ひどく冷たく感じた。

おう。四の五の言わずに抱け」

にやついた空鶴の声が、また降る。

「じゃが、これで借りは無しじゃ」

わあつたら」

目をつむったままの砕蜂の耳元で足音がする。誰かが丁寧に砕蜂の装束を剥いでいく。ぱさり、ぱさりとまた、他の衣擦れの音も混ざる。

「どんな花火より派手な祭りさ。三人で楽しもうじゃねえか」

そっと砕蜂が目を開けた。

それが、打ち上げの合図。

始まりはひそやかに置かれる指先。ひたひたと顔の上を指が歩く。拍子は十指で重ねられる。掌は覆い隠すように砕蜂の上を這っていく。火ではなく、大気のように、夜闇のように、まぶたを、頬を、唇をしっかりと叩く。その隠微な優しさは、砕蜂の肌をより鋭く敏感にさせた。ちら、と指の間から覗くのは、金色に眩しい灯火だけだった。

頭の中は、ただひたすらに白い。自分が気持ちよいかさ

え分からない。手足は凍るように冷たくなっていった。
頬から、首筋へ、耳へ、少しずつ、指先はたどっていく。
息もつけぬ。

唐突に、足の間へ別の手が触れた。
びくりと身体が震える。

へその上に、とろりとした何かが塗りつけられる。すっと冷たい。

急ぎすぎじやろう、空鶴

はん。こんなに欲しがってんのをほっとくお前が悪いんだろ」

二人の会話は、艶っぽさのかけらもない。けれど、何を言っているかは碎蜂にも分かった。たちまち体中が熱くなる。

辛抱を知らぬ輩め」

気長過ぎんだよ、お前は」

手は、碎蜂の顔を覆ったままでいる。声がどちらから聞こえてくるのかも定かではない。光と影は混ざり合ったまま、身体を包み込む。すっと肌と肌が擦れ合う暖かみを感じる。碎蜂の上に、誰かが覆い被さっても、手はなお離れずに碎蜂の目を覆う。

もどかしかった。

「…お手を」

碎蜂が口にした途端に、びたりと大気が凝る。
私は、大丈夫です」

むしろ望んでいるのだとは、言えなかった。
手は怯えるように、動きを止めている。

暫しの無言の後、唐突に覆いは取り去られ、光が差した。一瞬目がくらんだ。初めに見えたのは、満足そうな空鶴の顔。そしてその先には、主の豊かな脚がのびていた。柔らかなもの間に顔を挟まれて、そこから見えるのは、

見ては いけない ものだ。

目を閉じるなよ」

主の手首をつかんだままで、空鶴が言った。

おれが知っていて、お前が知らないものを見せてやる。おれはそう言った」

空鶴は左手を開く。主の手は諦めたように、碎蜂の胸の上へ動いた。かといってもみしだくわけでもなく、ただそこに置かれたままだ。

空鶴はふところからまた、金平糖を取り出す。口の中へ二、三粒放り込む。

そのまま、夜一の蜜壺へ口づけた。舌先で金平糖をその場所へ押しつける。

ぼとりと糸を引いて、砂糖菓子は落ちた。棘がまだ残ったままのそれは、碎蜂の頬の上に。

おい、忘れてんじゃねえぞ夜一」

分かっておる」

主のため息が、己の茂みにかかる。近い。自分もまた、見られているのだ。明らかに濡れたその場所を、間近で見られているのだ。もぞもぞと太ももをすりあわせる。だが、それで隠れるはずはない。

そとをかき分けられた茂みの奥を、そと指先でなぞられた。とろりととろけているのが、自分でも分かる。声を上げぬように、齒の奥を食いしばる。それでもなお、喉の奥から吐息が漏れる。

う、く、」

目を閉じるなよ」

霧がかったような視界の中で、ひざまずいたままの空鶴が言う。ふくよかな夜一の尻を撫で、その谷間に口づけ、舌を這わせる。懲りずにまた、金平糖を差し入れようとしている。何を見て、何を感じればいいのか、分からなかった。

わっあ、」

「…もうし、わけ……」

するりと己に入り込んだ指先に、声を上げた。別の生き物のように、壺口が夜一の指を締め付けていた。

ほう、」

初めて、夜一が満足そうな声を上げた。

「…もうし、わけ……」
言いたいことが、言えない。指が壺をかき回すごとに、頭の中までもかき回されてしまつて、何を言ったらいいのか分からなくなる。

そうじゃねえよ。『ありがとう』だろう」

空鶴が笑いながら混ぜ返す。

は、はあ……っ、あ、んっく、」

ん？」

あ、い……んんっ！」

碎蜂は何も言えない。一度まるびでた声は、留まることを知らなかった。激しく、落ちていく心地がする。突かれ、広げられるそのたびに、どこかへ落ちていく心地がして、碎蜂はぎゅっつとこぶしを固めた。

ほら、どうしたよ」

お。たわむれは、止せ」

夜一もまた、小さく笑う。その笑い声もまた、かすかに熱を帯びている。

いつしか、とろりとした何かが小さく碎蜂の上へ滴りそう

になっていた。唾液混じりの白い金平糖は、棘を少しずつつ溶かしながら、夜一の中へ押し込まれ、出てこない。

何個入るか、数えておけよ。後で競争だ」

空鶴は目配せして、またも金平糖を口へ含んだ。

唾液を飲み込む音がうるさい。誰かと思えば、碎蜂自身のものであった。唇がだらしなく緩んでは、自分でも聞いたことのない高い嬌声が漏れ出る。遠くでくちゅりと下品な水音が聞こえる。それもまた自分のものだ。激しく混ぜられた穴の出す音だ。

自分がなにものなのか、もう分からない。全身の痺れるような感覚も、下腹から脊髄を貫いて、脳をかき回し続ける指先も、誰の物なのか分からない。

抱かれるために、この身体はあるのだと、絶え間なく疼き続ける下半身が言う。抱かれ愛撫され滲ませて濡れるためにあるのだと、指を締め付ける下腹が言った。それはもはや、碎蜂でありながら碎蜂ではなかった。別の生き物が、指先をくわえて離さない。頭を混乱させる、困った指のせいか。それよりもっと訳が分からないのは、もっと強く、優しく、どなくて良いから、己の中に指を突き立てて欲しいと願う、碎蜂自身の内側からわき出る強い感情だった。

そう、まさに目の前で行われている、強い左手のように。品のない水音はすぐ上でも響いていた。たらりと口の中に

「…足りねえ」

しばらくして、空鶴が言った。

碎蜂は心地よい疲労に全身を包まれて、まどろんでいた。

だから、これは夢の中の会話なのかもしれないなかった。

なんでお前らだけ満足して、おれが…」

それで良いと言ったじやろう。それとも、

夜一はにやりとして、言葉を継いだ。

儂が抱いてやっても良いぞ。先刻の勝負に加えて、貸しふたつじゃがな」

落ちた雫は、甘かった。

順番に入れていこうぜ、夜一。ハンデは三つな。たくさん入った方の勝ち」

お……。いいじやろう。三つで足りるかの」

ひどく遠くで、その声を聞いていた。ただ、実感したのは、砂糖菓子が入り込んでからだだった。小粒の金平糖は最初は気付かない。突かれてはじめて、金平糖の棘が、先刻には無かった刺激を与えるのだと気付いた。

あ、あ、んうっ、あ……」

呼吸が速くなる。腰が跳ねる。押さえ込もうとしても独りでに身体が動く。もっと、早く、熱く、強く。ただそれだけが脳裏で爆発していた。数など数えられる訳がない。ただ必死で、落ちていかぬように、夜一の腰へすがりつくしか出来なかった。

ん、っく。……さすがに、六つはキツイの」

次はお前の番だぜ」

星の四つ目を数えたところで、碎蜂が先に果てた。